

ウナギ文解釈における語彙知識の役割と「Xハ」の意味 The Role of Lexical Knowledge in Interpretation of *Unagi*-Sentences and the Meaning of *X-wa*

岩本 遠億

要旨

This paper presents an argument that the so-called *unagi*-sentences in Japanese *X-wa Y-da* consist of two types, one with topic *X-wa* and the other with contrastive *X-wa*. The former requires that *X* be identified with the argument of ARG of *Y* whereas the latter exploits a functional predicate whose argument can be identified with *X*. Contrastive *X-wa* searches for a functional predicate in discourse or in the qualia structure of the predicative noun *Y*. The second type applies where the first fails to have a well-formed semantic interpretation to save it by a rule of construal that introduces a semantic function into the semantic gap found in it.

キーワード：ウナギ文、クオリア構造

序

名詞述語文（AはBだ）の意味解釈には、直喩（「花子は僕の太陽だ」など）を除くと、次の3パターンがあることが一般に認められている（益岡・田窪1992）。

- (1) AがBの集合の一要素であることを表すもの。
 - a. 源氏物語は平安時代の作品だ。
 - b. ≠平安時代の作品は源氏物語だ。
- (2) AとBが同一指示であることを表すもの。
 - a. 紫式部は源氏物語の作者だ。
 - b. =源氏物語の作者は紫式部だ。
- (3) AとBの間に直接的論理関係が存在せず、発話の場面が与えられて初

めて意味が確定するもの。

- a. 私は源氏物語だ。
- b. ぼくはうなぎだ。

平安時代の作品には、「源氏物語」のほかに、「土佐日記」「今昔物語」「枕草子」などがあるが、(1a)は「源氏物語」がそれらを要素の1つであることを意味しているのであって、AとBの同一性を述べているものではない。それは、(1a)のAとBを入れ替えた(1b)が同じ意味を表さないことから確認できる。(2)は、AとBが同一指示対象を指すもので、AとBを入れ替えても意味の違いは生じない。(3)のタイプはウナギ文と呼ばれる（奥津1978）。ウナギ文においては、AとBとの間には直接的な論理関係が存在せず、一定の文脈が与えられて初めてAとBの関係が特定され、意味解釈が可能となるとされている。

本稿は、ウナギ文の中には、そのような一定の文脈が与えられなくても解釈が可能となるものが存在すること、そして、それらの解釈にはAまたはBが含む語彙的意味が一定の役割を果たすこと、さらに、これまで見落とされていた助詞の解釈とウナギ文解釈との関係を明らかにすることを目的とする。

次節の「代表的先行研究」で概観するように、ウナギ文解釈の問題は、ウナギ文には含まれていない事象情報をどこから供給するかという一点に集約される。統語論的アプローチでは、そのような事象情報は、そもそも深層構造において表示されていたのが変形によって削除されたと考え、語用論的アプローチでは、すでに文脈において意味的に提示されている事象情報をウナギ文が拾い上げると考える。一方、語彙意味論的アプローチでは、ウナギ文に含まれる語彙そのものの中に事象情報が含まれると考える。本稿は、現在研究が推進されている生成語彙理論の枠組みがこの問題に与えることのできる解決の範囲を明らかにしようとするものである。

1. 代表的先行研究

ウナギ文の分析に関する先行研究は、理論的立場に立つものに限定すると、統語的アプローチ、語用論的アプローチ、語彙意味論的アプローチの3つに分類することができる。この節では、それぞれの代表的な分析を取り上げ、論点を整理することにする。

1.1. 統語的アプローチ

統語的アプローチとは、最初期の生成文法の発想を援用したもので、奥津（1978）と北原（1981）が代表的である。

1.1.1. 奥津（1978）の「動詞代用分析」

奥津（1978）は、ウナギ文の背後には、動詞を述語とする完全文（深層構造）が存在し、それが各種の変形規則を経て、ウナギ文になるという分析を提示している。以下に、代表的例を挙げる。

- (4) ぼくはうなぎを [食べたい]
↓ 「だ」による代用
ぼくはうなぎ [を] だ
↓ 格助詞削除
ぼくはうなぎだ

奥津（1978）がこのような動詞代用分析を提案するのは、動詞としか共起しない副詞がウナギ文に現れ得るからである。次の例を参照されたい。

- (5) ぼくは昨日うなぎだった

「昨日」という時の副詞が修飾するのは、「うなぎを食べた」という出来事である。このような時の副詞がウナギ文に現れるのは、表面的な「うなぎだ」の背後（深層構造）に時制辞を伴う動詞が存在しているからだと奥津（1978）は考えたのである。以下は、奥津（1978）による(5)の派生過程である。

- (6) ぼくは昨日うなぎを [食べた]
↓ 「だ」による代用
ぼくは昨日うなぎ [を] だった
↓ 格助詞削除
ぼくは昨日うなぎだった

奥津（1978）の動詞代用分析では、深層構造の動詞の時制は判定詞（だ）に引き継がれているが、これが動詞代用分析の根拠となった。これに対し、北原（1981）は時の副詞は必ずしも判定詞の時制と一致しないとし、奥津（1978）の動詞代用分析を批判した。これについては、次節で述べる。

1.1.2. 北原（1981）の「分裂文分析」

奥津（1978）の動詞代用分析の根拠は、時の副詞が動詞を代用する判定詞の時制と一致することであった。しかし、北原（1981）は、(7)においては、「昨日」は「だ」と一致していないことを根拠に、奥津説を退け、「分裂文分析」を提示している。

(7) ぼくは昨日うなぎだ。

「分裂文分析」とは、「うなぎだ」の背後に動詞があると考えた奥津（1978）とは反対に、「ぼくは」の背後に動詞を述語とする文があるとするものである。

(8) ぼくはうなぎ食べたい

↓ 分裂文化
ぼく [が食べたい] のはうなぎだ
↓ 格助詞・動詞削除
ぼく [の] は うなぎだ
↓ 「の」削除
ぼくはうなぎだ

この分析では、「ぼくはうなぎを食べたい」を一旦分裂文「ぼくが食べたいのはうなぎだ」に変換し、その後、不必要な部分を順次削除して行くという手法をとっている。これによると、(7)は以下のような派生過程を持つことになる。

- (9) ぼくは昨日うなぎを食べた
↓ 分裂文化
ぼくが昨日食べたのは うなぎだ
↓ 「の」削除
ぼくは昨日 うなぎだ

1.1.3. 統語的アプローチの限界と洞察

これらの統語論的アプローチは、生成変形文法のごく初期の理論 (Chomsky 1965) を利用したものだが、変形規則に対する制約が考慮されておらず、思いつく限りの変形操作が可能となるため、理論的に破綻しており、統語理論の中ではこのような分析が省みられることはなくなった。しかし、これらの統語的分析が捉えようとした、「ウナギ文」には隠れた事態が解釈として含まれるという洞察は、どのようなアプローチにおいても共通して取り扱わなければならないものである。

1.2. 語用論的分析

統語操作を用いずに「ウナギ文」が含む事態情報を文脈から取り込もうとするのが語用論的アプローチで、その代表的なものに坂原 (1990) と西山 (2003) がある。

1.2.1. 坂原 (1990) の換喩 (メトニミー) 分析

坂原 (1990) は「ウナギ文」の解釈には換喩 (メトニミー) が関与しているとの分析を提示している。換喩とは、しかるべき文脈において、どんな名詞でも、それが指示する個体と関連する個体を表すことであるが、次の (10) (11) では、「バイオリン」が「バイオリンを弾くバイオリニスト」を「アサヒビール」が「アサヒビールの株」を換喩によって表している。

- (10) 今日はバイオリンがお休みだ。
(バイオリン=バイオリン奏者)
(11) 太郎はアサヒビールを7000円で買った。
(アサヒビール=アサヒビールの株)

坂原（1990）は、「ウナギ文」の解釈に換喩が関与するとして、以下のような分析を提示している。

- (12) αは、vだ
↓
αのRは、vだ

「α」を「αのR」の換喩表現と捉え、「R」の値は文脈に基づき、語用論的に決定されるとされる。これを「ぼくは、ウナギだ」に適用したものが(13)(14)である。

- (13) ぼくは、ウナギだ
↓（ぼく→ぼくのR）
ぼくのRは、ウナギだ
(14) ぼくは、ウナギだ
↓（客→注文料理）
ぼくの注文料理は、ウナギだ

坂原（1990）の換喩分析は、西山（2003）によって厳しく批判されることになる。

1.2.2. 西山（2003）の措定文分析

西山（2003）は措定文分析を提示するにあたり、坂原（1990）のメトニミー分析を以下のように批判している。

[1] メトニミー分析は誤った予測をする。メトニミー分析によると、容認度の低い(15a)が(15b)という適格な意味解釈を持つことを許してしまう。

- (15) a. ?ぼくはおいしい／高い。
↓
b. ぼくの注文料理はおいしい／高い。（西山2003:330-331）

[2] 一般的なメトニミーには不可能な代名詞照応がうなぎ文で可能であることに説明がつかない。(16b)のように一般的に代名詞はメトニミーとなり得ないが、代名詞を用いた「ウナギ文」は(17b)のように適格文である。

- (16) a. この町ではプラトンは手に入りにくい。
(→プラトンの著作)
b. *この町では彼は手に入りにくい。(×彼の著作)
- (17) a. 花子さんは何だろう？天井かな？
b. 彼女はウナギだよ。(○彼女の注文料理)

[3] 一般的なメトニミーにおいては、数量詞はメトニミー解釈と一致し、元の名詞とは一致しないが((18b))、「ウナギ文」においては元の名詞と一致する((19b))。

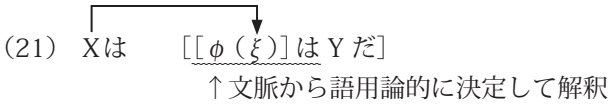
- (18) a. プラトンは全部売り切れだ。(→プラトンの著作)
b. *プラトンは全員売り切れだ。
- (19) a. *洋子、佐和子、花子は3つともウナギだ。
(*→洋子、佐和子、花子の注文料理)
b. 洋子、佐和子、花子は3人ともウナギだ。

以上のように西山(2003)は、坂原(1999)のメトニミー分析を退けた上で、「ウナギ文」の構造として(20)を提案している。

- (20) ぼくは [φは ウナギだ]
↑文脈から語用論的に決定して解釈
注文料理

これは、三上(1960)の「象は鼻が長い」における「鼻」の所有者が「象」であるのと並行的な構造を持つ。文脈的に決定されるφの所有者が「ぼく」と同定されることによってこの構文の意味が決定されると考えるのである。これを統語構造を用いて表すと、「ウナギ文」の一般的構造は以下のようになる。

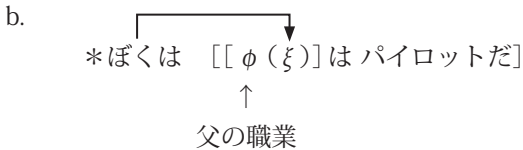
なお、波線部分は音声的には表出しない。



紙幅の都合上、詳細は割愛するが、この措定文分析はメトニミー分析の問題のすべてに解決を与えることができると西山（2003）では議論されている。なお、このような語用論的解釈は、XとYとの間に直接的な解釈が成立しない時のみ可能になることを押さえておく必要がある。父親の職業が何かが話題となっている文脈において「ぼくはパイロットだ」が「ぼくは父はパイロットだ」が(21b)の解釈を持つことはできない。

(22) 文脈：父親の職業が何かが話題となっている。

a. ぼくはパイロットだ。



それは、「ぼく」と「パイロット」との間に直接的な解釈（「ぼく」が「パイロット」の項）が可能だからである。「ウナギ」文解釈は、直接的解釈が不可能な場合に文が不適格とされることを避けるために導入される解釈規則（Jackendoff 1991, 1997）によるものなのである。

語用論分析は、理論的観点からは遺棄された統語的派生分析の直感を、語用論を用いて意味論的に再構築したものである。枠組みは異なっているが、解釈に含まれる事態情報が主語名詞を拡張したものか、述語名詞を拡張したものかという観点からこれらは以下のように分類することができる。

	主語名詞を拡張	述語名詞を拡張
統語論分析	分裂文分析（北原1980）	動詞代用分析（奥津1978）
語用論分析	メトニミー分析（坂原1990）	措定文分析（西山2003）

表1 統語論分析と語用論分析の分類

このように分類することで、問題の在処がより明瞭になる。解釈に含まれる事態情報は主語名詞に関連づけられるものなのか、述語名詞に関連づけられるものなのかということである。坂原（1990）のメトニミー分析の問題を明らかにした西山（2003）の措定文分析は、このような事態解釈は述語名詞に関連づけられるものだとすることを強く示唆するが、これは生成意味論によるアプローチに繋がることになる。

2. 生成語彙意味論によるアプローチ

上で紹介した西山（2003）の措定文分析（(21)）では、述語名詞Yの意味的な主語となる ϕ の値は文脈によって決定すると考えるが、今泉（2012）は名詞Yが含む意味に組み込まれた事態情報が「ウナギ文」の解釈に用いられる場合があるとの議論を展開している。

今泉（2012）が用いる理論的枠組みはPustejovsky（1995）の生成語彙意味論である。生成語彙意味論では、語の意味情報は、その語に含まれる世界知識のうち統語構造に反映されるクオリア構造と統語構造との接点となる項構造によって構成される。クオリア構造は項構造を介して統語構造と連結されるのである。クオリア構造は「構成役割 (Constitutive Role)」「形式役割 (Formal Role)」「目的役割 (Telic Role)」「主体役割 (Agentive Role)」の4役割から構成されるが、それぞれ「語彙項目 α の構成要素は何か」「 α の意味範疇は何か」「 α の機能は何か」「 α 存在するようになった起因は何か」を表す。これらのうち形式役割は項構造と同定され、統語構造と直接的に連結されることになる。なお、クオリア構造の4役割は、アリストテレスの「4原因説」の4原因を援用したものである。

(23) α の語彙構造

$$\left[\begin{array}{l} \alpha \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG1} = x \\ \dots \end{array} \right] \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{CONST} = \text{what } x \text{ is made of} \\ \text{FORMAL} = \text{what } x \text{ is} \\ \text{TELIC} = \text{function of } x \\ \text{AGENTIVE} = \text{how } x \text{ came into being} \end{array} \right] \end{array} \right]$$

以下にクオリア構造を用いた語の意味表示の具体例を示す。

(24) *car*の語彙構造

$$\left[\begin{array}{l} \text{car} \\ \text{ARGSTR} = [\text{x: artifact_ind}] \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{CONST} = \text{engine, tire, seat, steering, shassis, ...} \\ \text{FORMAL} = \text{x: vehicle} \\ \text{TELIC} = \text{transport (e}_1, \text{y, with x)} \\ \text{AGENTIVE} = \text{make (e}_2, \text{z, x)} \end{array} \right] \end{array} \right]$$

語の中には二つ以上の意味範疇に属するもの、すなわち二つ以上の意味範疇を内包するものもある。Pustejovsky (1995)はそれを「語彙概念範列」(lexical conceptual paradigm (lcp)) と呼び、その例として*book*を挙げている。Pustejovsky (1995:101)の*book*の語彙構造には、構成役割が含まれていないが、ここではそれを追加したもの示す。

(25) *book*の語彙構造

$$\left[\begin{array}{l} \text{book} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG1} = \text{x: information} \\ \text{ARG2} = \text{y: phys_obj} \end{array} \right] \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{infomation} \cdot \text{phys_obj_lcp} \\ \text{CONST} = \text{paper, pages, letters, cover} \\ \text{FORMAL} = \text{hold (y, x)} \\ \text{TELIC} = \text{read (e}_1, \text{w, x, y)} \\ \text{AGENTIVE} = \text{write (e}_2, \text{v, x} \cdot \text{y)} \end{array} \right] \end{array} \right]$$

生成語彙意味論でこのようなクオリア構造を語彙記載事項の中にも含めるのは、これらの情報が文の意味解釈に用いられるからである。

- (26) a. John started a book.
b. Bill finished his beer.

(26a)は「Johnが本を書き始めた」を(26b)は「Billがビールを飲み終わった」

を意味するが、これらの文には「write」や「drink」という動詞は現れていない。本は書くことによって存在するようになるというその存在原因、ビールは飲むために作られるというその機能目的が、これらの文の意味解釈に用いられている。生成意味論では、このような情報を文の意味解釈に用いるために、名詞の語彙記載事項に含め、それらを文の意味解釈の際、引き出して利用するシステムを仮定するのである (Pustejovsky 2011)。

このような文解釈システムによると、「ぼくは、ウナギだ」の解釈にも「ウナギ」の語彙記載事項に含まれる目的役割の「食べる」という情報が用いられていると考えることになる。なお、ここでの「ウナギ」は「鰻料理 (鰻丼／鰻重など)」のメトニミーとしての「ウナギ」を意味する。「ウナギ」の語彙記載事項は以下のようになる。

(27) 「ウナギ」の語彙構造

$$\left[\begin{array}{l} \text{unagi} \\ \text{ARGSTR} = [\text{ARG1x: cuisine_ind}] \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{CONST} = \text{grilled eel, boiled rise, bowl/box} \\ \text{FORMAL} = x \\ \text{TELIC} = \text{eat} (e_1, y, x) \\ \text{AGENTIVE} = \text{cook} (e_2, z, x) \end{array} \right] \end{array} \right]$$

この目的役割を利用することにより。「ぼくはウナギを食べる」という解釈が生じるというのが今泉 (2012) の議論である。

このように名詞述語に含まれるクオリア情報が「ウナギ文」の解釈に利用され得るのであれば、「ウナギ文」の中には文脈依存でない解釈も可能なものが存在するという予測が立てられることになる。実際「ぼくはウナギだ」を先行文脈なしで聞いても、これがレストラン等での注文の場面であることが推測される。「ぼくはMacだ。ぼくはWindowsだ」においても、どのタイプのコンピュータを使っているかを話題にしていることが分かる。すなわち、「ウナギ」「Mac」「Windows」が持っているクオリア構造の中に、文脈を構築する情報が含まれているのである。一方「ぼくは砂だ」や「ぼくは草だ」のような文は先行文脈なしに解釈することは困難である。このことも述語名詞には文脈を構築する事態情報を含むものとそうでないものがあることを示唆している。

以下のような例も文脈なしに解釈可能なものである。

- (28) a. お父さんは？
b. 父は病院です。

この文の自然な解釈は以下のようなものである。

- (29) a. 父は、病院に治療を受けに行きました。
b. 父は、病院に入院しています。
c. 父は、病院に仕事に行きました（＝父は医者、看護師など）

一方、(30) のような解釈は、特定の先行文脈が必要となる。しかも、それは、複数の人物が「Xは何が嫌いか」「Xは何を解体したか」ということを話題としている場面である。

- (30) a. 父は、病院が嫌いです。
b. 父は、病院を解体しました。

ここで、「Xは」の解釈に注目したい。(29) の解釈の場合、「Xは」は「主題」となるが、(30) の解釈の場合、「Xは」は「対比」となる。(29) の解釈は「病院」が含むクオリア構造の情報を利用したものであるのに対し、(30) では「病院」のクオリア構造の情報を利用していない。このことから、述語名詞のクオリア構造の情報を利用した解釈の場合、「Xは」は「主題」となり、そうでない場合「対比」となるという一般化を得ることができそうにも見える。しかし、「ウナギ」のクオリア構造の情報を利用した「ぼくは、ウナギだ」の「ぼくは」は「対比」である。単純に名詞述語のクオリア構造の情報の利用の場合は「主題」、そうでない場合は「対照」と一般化することはできない。「ウナギ文」の「Xは」の解釈と、語彙情報の利用や文脈からの意味補給はどのような関係にあるのか。次節はこの点について考察する。

3. 「Xハ」の解釈と補給される情報の出処

「ウナギ文」において「Xは」が主題の解釈を持つものは述語名詞が「場所」という意味を持っており、「X」がそこにいるという解釈を受ける場合に限られる。以下の例を参照されたい。

- (31) $\left. \begin{array}{l} \text{a. 病院} \\ \text{b. 図書館} \\ \text{c. 台所} \\ \text{d. 庭} \\ \text{e. 教室} \end{array} \right\} \text{です。}$
- Xは、
- ↑
- [主題]

- (32) $\left. \begin{array}{l} \text{a. 椅子} \\ \text{b. 畳} \\ \text{c. 自動車} \\ \text{d. 箱} \\ \text{e. 鞆} \end{array} \right\} \text{です。}$
- Xは、
- ↑
- [対比]

「病院」は、物体の存在位置や行為が行われる空間としての場所 (LOCATION) という概念的意味を持つ。このような概念的意味を持つものは他に「図書館」「会社」「台所」「教室」などの名詞がある。一方、「椅子」「畳」「自動車」「箱」「鞆」などは、人が座ったり、物を入れたりすることはできても、LOCATION という意味を持たない。その違いは、以下の例でも確認できる。

- (33) a. {病院/図書館/台所/京都} にある/いる。
 b. * {椅子/畳/自転車/箱/鞆} にある/いる。
 c. {椅子の上/畳の上/自動車の中/箱の中/鞆の中} にある/いる。

「椅子」「畳」「自動車」「箱」「鞆」は「物体」であって「場所」ではない。そのため、これらは「上」「中」などの空間関数によって「場所」に写像されなければ、「場所」として機能することができない。(33b)と(33c)の適格性の違いがこれを示している。なお、日本語は「物体」を「場所」に写像する空

間名詞として「上」「下」「前」「後ろ」「横」「先」「右」「左」「近く」などがある。一方、「病院」「図書館」「台所」「庭」「教室」などは、空間関数なしに「場所」として機能することが(33a)によって示されるが、これらは「中 (INSIDE)」という空間関数を内包している (Iwamoto 1992)。「病院/図書館/台所/京都にある/いる」は「病院の中/図書館の中/台所の中/京都の中にある/いる」の意味であり、「病院の上/図書館の前/台所の下/京都の近くにある/いる」などの意味を表すことができないことから、これが確認される。

「病院」「図書館」「台所」「庭」「教室」などが「中 (INSIDE)」という空間関数を内包する「場所」を表していることは、(34a) と (34b) の平行性からも明らかである。

- (34) a. 父は {病院/図書館/台所/庭/教室} です。
b. 本は {椅子の上/畳の上/自動車の中/箱の中} です。

「父」「本」が「主題」解釈を受けるという点でもこれらは共通している。さらに、(35a) と (35b) の対比からも、「病院」「図書館」「台所」「庭」「教室」などが「中 (INSIDE)」という空間関数を内包する「場所」を表していることが確認される。

- (35) a. 本は {病院/図書館/台所/庭/教室} です。
b. *本は {椅子/自転車/箱/鞆} です。

以上のことから、「病院」「図書館」「台所」「庭」「教室」などは、それら自体が「場所」という意味範疇を持つことが確認できるのである。一方、これらは「作る」や「破壊する」などの動詞と共起することからも「物体」という意味範疇も持つ。すなわち、これらは語彙概念範列 (lexical conceptual paradigm) なのである。語彙構造の中ではこれをドット・タイプとして表示する。「病院」の語彙構造は以下のようになる。

(36) 「病院」の語彙構造

byooin																							
ARGSTR =	<table style="border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="border-right: 1px solid black; padding-right: 5px;">ARG1 = x: artifact_ind</td> <td style="padding-left: 5px;">]</td> </tr> <tr> <td style="border-right: 1px solid black; padding-right: 5px;">ARG2 = y: space</td> <td style="padding-left: 5px;">]</td> </tr> </table>	ARG1 = x: artifact_ind]	ARG2 = y: space]																		
ARG1 = x: artifact_ind]																						
ARG2 = y: space]																						
QUALIA =	<table style="border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="border-right: 1px solid black; padding-right: 5px;">artificial_ind· space_lcp</td> <td style="padding-left: 5px;">]</td> </tr> <tr> <td style="border-right: 1px solid black; padding-right: 5px;">CONST =</td> <td style="padding-left: 5px;"> <table style="border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="border-right: 1px solid black; padding-right: 5px;">doctor: d, nurse: n, patient: p,</td> <td style="padding-left: 5px;">]</td> </tr> <tr> <td style="border-right: 1px solid black; padding-right: 5px;">examination room,</td> <td style="padding-left: 5px;">]</td> </tr> <tr> <td style="border-right: 1px solid black; padding-right: 5px;">sickroom, x - ray room, ...</td> <td style="padding-left: 5px;">]</td> </tr> </table> </td> </tr> <tr> <td style="border-right: 1px solid black; padding-right: 5px;">FORMAL = hold (e₁, x, y, inside x)</td> <td style="padding-left: 5px;">]</td> </tr> <tr> <td style="border-right: 1px solid black; padding-right: 5px;">TELIC =</td> <td style="padding-left: 5px;"> <table style="border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="border-right: 1px solid black; padding-right: 5px;">cure (e₂, d, p)</td> <td style="padding-left: 5px;">]</td> </tr> <tr> <td style="border-right: 1px solid black; padding-right: 5px;">care (e₃, n, p)</td> <td style="padding-left: 5px;">]</td> </tr> <tr> <td style="border-right: 1px solid black; padding-right: 5px;">stay (e₄, p, y)</td> <td style="padding-left: 5px;">]</td> </tr> </table> </td> </tr> <tr> <td style="border-right: 1px solid black; padding-right: 5px;">AGENT = make (e₃, v, x)</td> <td style="padding-left: 5px;">]</td> </tr> </table>	artificial_ind· space_lcp]	CONST =	<table style="border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="border-right: 1px solid black; padding-right: 5px;">doctor: d, nurse: n, patient: p,</td> <td style="padding-left: 5px;">]</td> </tr> <tr> <td style="border-right: 1px solid black; padding-right: 5px;">examination room,</td> <td style="padding-left: 5px;">]</td> </tr> <tr> <td style="border-right: 1px solid black; padding-right: 5px;">sickroom, x - ray room, ...</td> <td style="padding-left: 5px;">]</td> </tr> </table>	doctor: d, nurse: n, patient: p,]	examination room,]	sickroom, x - ray room, ...]	FORMAL = hold (e ₁ , x, y, inside x)]	TELIC =	<table style="border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="border-right: 1px solid black; padding-right: 5px;">cure (e₂, d, p)</td> <td style="padding-left: 5px;">]</td> </tr> <tr> <td style="border-right: 1px solid black; padding-right: 5px;">care (e₃, n, p)</td> <td style="padding-left: 5px;">]</td> </tr> <tr> <td style="border-right: 1px solid black; padding-right: 5px;">stay (e₄, p, y)</td> <td style="padding-left: 5px;">]</td> </tr> </table>	cure (e ₂ , d, p)]	care (e ₃ , n, p)]	stay (e ₄ , p, y)]	AGENT = make (e ₃ , v, x)]
artificial_ind· space_lcp]																						
CONST =	<table style="border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="border-right: 1px solid black; padding-right: 5px;">doctor: d, nurse: n, patient: p,</td> <td style="padding-left: 5px;">]</td> </tr> <tr> <td style="border-right: 1px solid black; padding-right: 5px;">examination room,</td> <td style="padding-left: 5px;">]</td> </tr> <tr> <td style="border-right: 1px solid black; padding-right: 5px;">sickroom, x - ray room, ...</td> <td style="padding-left: 5px;">]</td> </tr> </table>	doctor: d, nurse: n, patient: p,]	examination room,]	sickroom, x - ray room, ...]																
doctor: d, nurse: n, patient: p,]																						
examination room,]																						
sickroom, x - ray room, ...]																						
FORMAL = hold (e ₁ , x, y, inside x)]																						
TELIC =	<table style="border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="border-right: 1px solid black; padding-right: 5px;">cure (e₂, d, p)</td> <td style="padding-left: 5px;">]</td> </tr> <tr> <td style="border-right: 1px solid black; padding-right: 5px;">care (e₃, n, p)</td> <td style="padding-left: 5px;">]</td> </tr> <tr> <td style="border-right: 1px solid black; padding-right: 5px;">stay (e₄, p, y)</td> <td style="padding-left: 5px;">]</td> </tr> </table>	cure (e ₂ , d, p)]	care (e ₃ , n, p)]	stay (e ₄ , p, y)]																
cure (e ₂ , d, p)]																						
care (e ₃ , n, p)]																						
stay (e ₄ , p, y)]																						
AGENT = make (e ₃ , v, x)]																						

ここで、この「病院」の語彙構造と「ウナギ」の語彙構造(27)を比較してみよう。前者には二つの項ARG1=artifact_indとARG 2=spaceが含まれているが、後者には一つの項cuisine_indが含まれている。「父は病院です」においては、ARG2のspaceが「父」と直接リンクされ「父の存在場所」と解釈される。Space自体が物体の存在場所、あるいは事態の発生場所という意味的述語の機能を持つからである (Iwamoto 1992)。一方、ウナギのARG = cuisine_indには「ぼく」に対する意味的述語機能はない。そのため、解釈規則によってウナギのクオリア構造に含まれる意味的述語機能を引き出さなければならない。eat (e,y,x) が引き出されれば「私は鰻を食べる」、cook (e,z,x) が引き出されれば「私は鰻を作る」という解釈が生じる。

「主題」と「対比」の解釈が生じるメカニズムは、上記の議論からすでに明らかである。主語が述語名詞のARGと直接リンクされる場合、「主題」解釈が可能となるが、解釈規則によりクオリア構造から意味的述語機能を引き出さなければならない場合、「対比」となるのである。このような意味的述語機能は、クオリア構造に含まれない事態情報を文脈から拾い上げて解釈に用いることもできる。それが(30)や(37)に例示される「ウナギ文」の解釈である。これらは、文脈からの意味供給がなければ意味解釈ができない。

- (37) a. 君たちは何の解体を行っているの？
 b. 僕は飛行機です。
 c. 僕は列車です。
 d. 僕はタンカーです。

ここで、名詞述語のクオリア構造から意味的述語機能を引き出す場合と、文脈から引き出す場合、それぞれの構造を提示しておく。

- (38) a. ぼくは、ウナギだ。
 b. ぼくは [[[[ϕ (ξ)]は ウナギだ]]]
 c. 解釈1 $\phi = \text{eat} (e_1, y, x)$
 $\xi = y = \text{ぼく}$
 d. 解釈2 $\phi = \text{cook} (e_2, z, x)$
 $\xi = z = \text{ぼく}$

unagi	
ARGSTR = [ARG1x: cuisine_ind]	
QUALIA =	CONST = grilled eel, boiled rise, bowl/box
	FORMAL = x
	TELIC = eat (e_1, y, x)
	AGENTIVE = cook (e_2, z, x)

- (40) a. 君たちは何の解体を行っているの？
 b. 解体 (e, x, y)
 c. ぼくは [[[[ϕ (ξ)]は 飛行機です]]].
 d. $\phi = \text{解体}$
 $\xi = x = \text{ぼく}$
 $y = \text{飛行機}$

このように、西山（2003）の措定文分析は、文脈による ϕ の決定だけでなく、述語名詞のクオリア構造が含む事態情報も取り込むことができるものである。

4. 結論

名詞述語文「XはYだ」の解釈には、Xが述語名詞YのARGの項と同定される場合とそうでない場合がある。同一化される場合、「Xは」は主題解釈となるが、これには一見「ウナギ文」のように見える「父は病院だ」のようにYが場所名詞を表すものも含まれる。このようなものは、所謂「ウナギ文」から除外して分析しなければならない。

XがYのARGの項と同定されない場合、Xは「対比」解釈となり、Xが対比させられるべき事態情報を解釈規則によって引き出さなければならない。それは先行文脈に含まれる事態情報の場合と、Yのクオリア構造に含まれる事態情報の場合がある。

注

- ¹ 人工物にはこれら4つの役割が全て含まれるが、自然物には「主体役割」は含まれないと仮定されている (Pustejovsky 1995, Pustejovsky 2011, Pustejovsky and Jezek 2016)。
- ² (34b) は「ウナギ文」解釈が不可能である。これは「ウナギ文」の主語に有生性制約が適用していることを示唆している。

参考文献

- Chomsky, Noam (1965) *Aspects of the Theory of Syntax*, Cambridge, MA: MIT Press.
- 今泉水穂 (2012) 「名詞述語文の生成語彙論的解釈」『文芸言語研究 言語編』61, pp. 83-101, 筑波大学.
- Iwamoto, Enoch (1992) *Visibility and Argument Identification—A Conceptual Semantic Approach to Alamlak and Japanese*, Ph.D. dissertation, The Australian National University.
- 北原保雄 (1981) 『日本語の世界6 日本語の文法』中央公論社.
- Jackendoff, Ray (1991) "Parts and Boundaries," *Lexical and Conceptual Semantics*, ed. by Beth Levin and Steven Pinker, 9-45, Cambridge, MA: Blackwell.
- Jackendoff, Ray (1997) *The Architecture of the Language Faculty*, Cambridge, MA: MIT Press.
- 久野暲 (1973) 『日本文法研究』大修館書店.
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法—改訂版』くろしお出版.
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句』ひつじ書房.
- 奥津敬一郎 (1978) 『「ボクはウナギだ」の文法』くろしお出版.
- 小野尚之 (2005) 『生成語彙意味論』くろしお出版.

Pustejovsky, James (1995) *The Generative Lexicon*, Cambridge, MA: MIT Press.

Pustejovsky, James (2011) "Coercion in a General Theory of Argument Selection," *Linguistics* 49-6:1401-1431.

Pustejovsky, James and Elisabeth Jezek (2016) "A Guide to Generative Lexicon Theory" ms.

坂原茂（1990）「役割、ガ・ハ、ウナギ文」『認知科学の発展』3, pp. 29-66, 講談社.